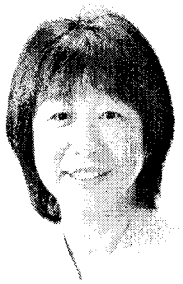
こんにちは 松坂みち子です



日本共産党市議会議員　松坂みち子の活動報告
＜ №46　2011. 9. 11＞　　連絡先　402-1622

水晶の歌声

ナターシャ・グジーのチャリティーコンサートに行って来ました。市内にある法律事務所の５周年記念に取り組まれたものですが、「水晶の歌声」と評される透き通った歌声に魅了されました。

ナターシャさんのプロフィールをご紹介します。機会があれば、ＣＤなどで聴いていただきたいと思います。

ウクライナ生まれ。

ナターシャ６歳のとき、１９８６年４月２６日未明に父親が勤務していたチェルノブイリ原発で爆発事故が発生し、原発からわずか３．５キロで被曝した。その後、避難生活で各地を転々とし、キエフ市に移住する。ウクライナの民族楽器バンドゥーラの音色に魅せられ、８歳の頃より音楽学校で専門課程に学ぶ。

１９９６年・９８年救援団体の招きで民族音楽団のメンバーとして２度来日し、全国で救援公演を行う。

２０００年より日本語学校で学びながら日本での本格的な音楽活動を開始。その美しく透明な水晶の歌声と哀愁を帯びたバンドゥーラの可憐な響きは、日本で多くの人々を魅了している。

２００５年7月、ウクライナ大統領訪日の際、首相官邸での夕食会に招待され、演奏を披露。コンサート、ライブ活動に加え、音楽教室、学校での国際理解教室やテレビ・ラジオなど多方面で活躍しており、その活動は高校教科書にも取り上げられている。

みち子のひとりごと　爪跡

地形の関係でしょうか。台風１２号は市内ではあまり影響がなかったのに、紀南地域では大きな爪跡を残して行ってしまいました。

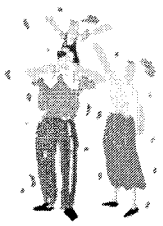
崩れた山や土砂に埋もれた家々、あふれ出た川の水にのみこまれた集落。その日は結納当日だったという娘さんが、また、子どもを先に逃がした母親が命を落としました。これからの生活にどれだけ希望を持っていたでしょうか、子どもの成長をどれほど見届けたかったでしょうか。

哀しみとともに怒りが湧いてきます。

防災対策はどうなっていたのでしょう、避難体制や情報提供は？林業が廃れて山が荒れ、保水力が落ちているという指摘もあります。

被害を最小限にくい止めるための対策をとるのは政治の仕事です。

命を大切にする政治こそが強く求められます。



★ 松坂みち子の一般質問は 14日(水) 午後の予定です。

「戦争」「原発」報道に思う

放送評論家　藤久ミネさん

『勇気を継ぐ番組を期待ー　あってはならない免責』

8月29日付赤旗から紹介します

「戦争の最初の犠牲者は〝真実〟である」とは、米・シカゴディリーニューズのG・ウェラー記者の名言である。しかし戦時にゆがめられた報道も、必要な情報、記録さえ残されていれば時を経て新たな事実を発掘することが可能になる。

6日放送のNHKスペシャル「原爆投下・活かされなかった極秘情報」は、テニアン島で爆撃訓練を重ねた〝特殊任務機〟が飛来していることを知りながら、空襲警報すら出さずに広島・長崎の市民20万人が犠牲となったことを66年ぶりに報道した。

またNHKの「戦争証言」プロジェクトは、10日放送の「封印された大震災ー愛知半田市」によって、1944年12月7日の、東南海地震の無残な実態をほぼ初めて明らかにした。軍用機製造工場（中島飛行場）の壊滅を秘匿するために、倒壊家屋約5万、2千人近い死者の多くは学徒動員による若い男女であったことも、一切報じられずにきた。しかも翌12月8日は、3回目の開戦記念日とあって、各紙とも1面トップは昭和天皇の写真で、その下の片隅に1段の記事で、地震と損害軽微の文字があるだけだ。

確かに時がたてば多くの秘密事項が次第に姿をあらわす。が、それは〝歴史の審判〟を受けたことになるだろうか。当事者はすべて去り、免責されている。

福島原発事故報道で、同様の免責があってはならないだろう。そのことを痛感させたのは、NHK12日放送の「AtoZ～なぜ消えた原発作業員」だった。今、福島原発の建屋付近は立ち入り禁止。作業員への接近もご法度、とのなかで鎌田靖キャスターと新名洋介記者が敢行した生々しい作業員への取材である。東電公認の1次から3次下請け作業員の他に、6次、7次までの闇下請け作業員がいて、その手配師は暴力団関係者らしい。匿名インタビューに応じた手配師や作業員の話によると、大阪の西成愛隣地区などから負債に苦しむ労務者が高額の賃金を餌に集められているらしい。

こうした作業員たちは宿舎に戻らず、建屋内で仮眠をとって作業を続行するとか、線量オーバーや時間切れを告げるアラームメーターを「〝鳴き殺し〟にせんと仕事にならない」などゾッとする話も聞こえてきた。すでに百数十名の作業員が行方不明とも言われる。

思えば事故当初から、原発報道は東電や保安院、内閣官房からの〝発表〟報道ばかりである。原発報道の最初の犠牲者が〝真実〟であってはなるまい。「AtoZ」の勇気を継ぐ報道がほしい。